

汲田克夫における「健康管理能力」の史的展開と構造

松本圭朗¹⁾

1) 近畿大学

汲田克夫 健康管理能力 排便 保健思想

【目的】

教育史を専門とする汲田克夫（1931-年）は大阪教育大学（1967-1992 年）等で勤務するなかで、学校保健を考究してきた人物である。汲田は戦後期の教育保健に関わる重要な教育学者とされ、その所論が検討されてきた。例えば、数見隆生・高橋裕子は、汲田が「学校保健における保健管理は教育過程」とみていたと指摘する¹⁾。しかし、その教育過程で形成すべき「保健管理／健康管理」の能力の内実は、仔細には検討されていない。そこで、本発表では、汲田の「健康管理能力」をめぐる所論の史的展開と構造の解明を目的とする。

【方法】

本発表では、汲田の「健康管理能力」の構造を描出するために、彼の学校保健に関する所論（文献）の史的展開を検討する。まず、なぜ明治期の教育体制を考究していた汲田が学校保健や健康教育に着目したのか、を確認する。つぎに、汲田がどのような教育思想家を拠り所として議論を展開したのか、を確認する。そのうえで、汲田による「健康管理能力」をめぐる議論の史的展開を辿り、その構造を描出する。

【結果】

汲田は虚弱体質であったことや、保健教育史の欠落という課題の発見等をおして、「健康に生きる権利と教育学がきりむすぶ保健思想の研究」を開始する²⁾。1966 年の養生観に関する研究を出発点に、道元・貝原益軒・ロック（John Locke）・宮本顕などの思想家を取り上げていく。そのなかで、汲田は「自主的な健康管理能力の育成をめざす排便の点検と指導」という排便教育の重要性を訴える³⁾。その意義は、「①飲食、睡眠、呼吸とともに、排泄は、基本的な生命現象であることを認識させる。」、「②排便の点検を通して、子どもたちが便秘や下痢、健康な規則正しい排便と自分の心身の健康状態（気分のよしあし、意欲の有無もふくめて）との相関関係や、うんこの両、色、におい、形などから、自分の健康状態を客観的、具体的に認識できる。」、「③きちんと朝、排便させる習慣をつけることは、それを通して生活全般の生活規律と保健に役立つ。」、「④家庭での排便のしつけが軽視されていることが認識され、家庭における健康の管理に役立ち、家庭教育の重要な一環となる。」、「⑤大腸と脳の密接な関係を理解し、心身二元論を克服し、心身一如の意識をもって、真摯の自己調整ができるようになる。」という点にあるとする⁴⁾。この排便教育によって、「④規則正しい、自然なりズミカルな生活、快食・快眠・快便が行なわれているか。」、「⑤継続的な健康観察。昨日、一昨日と比べて、今日の健康状態はどうか。」、「⑥毎日の健康状態を的確に捉え、それを記録化していく。」、「⑦健康障害への迅速で正しい対応と、心身の自己調整。」という「健康管理の基本四原則」に基づく健康管理能力を育成できるとする⁵⁾。

【考察】

汲田の健康管理能力は歴史・思想史研究を始点に、当時の教育実践・民間教育研究団体との関わりのなかで構想されたものであった。その健康管理能力は子どもの自主性に焦点を当てて構想されていた。すなわち、汲田は人間の基本的な生活行動のなかで、子どもの関心を喚起しやすく、子ども自身が客観的に把握しやすい排便を、健康管理能力の育成のための教材として設定していた。

¹ 数見隆生・高橋裕子：「教育保健」概念の意味・理解に関する検討. 日本教育保健学会年報：23-38, 2002

² 汲田克夫：近代保健思想史序説, 201, 医療図書出版社, 東京, 1974

³ 汲田克夫：なぜ「排便教育」をとりあげるか。（汲田克夫・稲田常子・千葉保夫ほか著）. 子どもの排便教育 [増補版], 12, 医療図書出版, 東京, 1979

⁴ 汲田克夫：健康管理は自分たちで。（汲田克夫編）. 小・中学生のからだと健康, 229, 創元社, 大阪, 1981

⁵ 汲田克夫：自主的な健康管理の力を育てる。（汲田克夫編）. 排便教育と生活指導, 18, あゆみ出版, 東京, 1981

